

縄文時代の 名取のようす。

I-5-①



I-5-①

8千年前から本格化した気候の温暖化は、6千年前頃にピークに達した。これによって大規模な海水面上昇がおり、仙台平野の低い部分にも海水が進入し、仙台平野は現在よりもはるかに北や西に大きく広がる湾を形づくっていました。現在、仙台空港があるところなどは水没し、丘陵付近まで海水が入り込んでいたようです。その当時のようすは、丘陵沿いに分布する貝塚からも推測できるでしょう。

この時に出現した内海の多くは、波のおだやかな遠浅の海でした。河川からそこに流れ込むことによって発生した豊富なプランクトンは、貝や魚にとって、とても良い環境を作り出したことでしょう。そして、縄文人はそこから多くの水産資源を手に入れ、生活を安定させることができたのでしょう。

内陸に入り込んだ海は、5千年前をさかいに退きはじめ、しだいに現在の海岸線に近づいていきますが、縄文人にとっては、今日のわれわれよりもはるかに海が身近な存在だったのでした。

I-5-②



I-5-③-a

2万5千～1万5千年前 (旧石器時代)の日本

寒冷な気候であったために、海水は氷や雪となって固定され、海水面が現在よりも低くなり、その分だけ陸地が広がったようです。津軽・宗谷・対馬の海峡は、大陸と結ばれ、日本海は大きな湖となっていたようです。

I-5-③-a



I-5-③-b

7千～6千年前 (縄文時代)の日本

1万年前頃から温暖な気候に変化し、氷や雪となって固定されていたものが解け、海水が内陸に入り込んで、現在の陸地よりも少しせまかったようです。このようにして、日本は大陸から切り離されていったのです。

I-5-③-b



I-5-③-c

現在の日本

内陸に入り込んだ海は、5千年前をさかいに退きはじめ、しだいに現在の海岸線に近づいてきました。

I-5-③-c